

正法

7 1980

心の友を求めて

菩提樹下に悟りをひらかれた釈尊は

一鉢を手にし 心の友を求めて

北に向って歩きだされた

千古の雪をいただいたヒマラヤは

白銀に輝いている

ガンガーの流れは変わろうとも

わが心は永遠に変わらじ

吹く風は冷たく 鉢は空しくとも

釈尊はひたすらに歩まれた

われ、今、釈尊にならいて

北に向って歩まん

心を許して語り合える友を求めて

ひたすらに歩まん

一人の友あれば

手を取り合いて

法のまえに泣かん

インドより帰って

目 次

心の友を求めて	園頭広周	表紙
巻頭の詩(出逢い)	園頭広周	1
人生と悟り(高橋信次先生のことば)		2
法 語		6
特輯 釈尊は日本に生れていられた		8
悟りに至る道		33
正法会第一回インド仏蹟巡拝紀行	園頭広周	50
関西地区反省禅定研修会		56
紫水園日記	園頭広周	57
編集後記		62

————— 巻頭の詩 —————



出逢い

園 その
頭 がしら
広 ひろ
周 ちか

人との出逢いは悲しく

人との出逢いは楽し

出逢いの中で泣き

出逢いの中で笑う

泣き且笑いつつ

魂は成長する

泣きたい時は 思ひつきり泣くがよい

楽しい時は 思ひつきり笑うがよい

喜びと悲しみの奥に聖地がある

ことを知って人は偉大となる

特

輯

釈尊は日本に生まれていられた(二)

私は「宇宙即我」の体験の真実を理解して下さる人を求めている

真実は真実である

六月号で高橋信次先生との出会いを書いた。霊道を開いた時、高橋信次先生の上に釈尊のお姿を見、「ブッダ」とよんで胸が詰って感激の涙を流したこと、この事実は事実として私の心に深く刻まれて消えることはない。その時の私の気持は「やっと帰るべきわが家に辿り着いた」という恰も嬰兒が母親の乳房に縋っているような心の安らかさであった。求め求めてやっとたづね当てたその喜び。桂小金治の司会する「それは秘密です」で、四月十五日、台湾で写真材料店をしているという人が、生みの母親をたずねて来日して一回目はだめで、二回目に来日した時に親切なお巡りさんから、「日本のテレビ局に人を探してくれるところがある」と教えられて、そうして一人で家政婦をして暮っていた母親と涙の対面をしたのがあった。いつもこの番組を見て「よかったよかった」と私も涙を流すのであるが、今生で生き別れになった者同志が何十年を経て再会しても身をよじって泣いて、永年探し求めていた人にめぐり会えた喜びに心は感激し安らかになるのである。

「あなたはよく約束を守ってくれました。インドの当時から二五〇〇年ぶりにこうしてここで逢うことができました」

高橋信次先生にいわれた時の喜び、心の安らかさ、溢れ出る涙はどう表現していいのか表現のしようがない。

それと同時に、私が終戦後復員して仕事に失敗して宗教界に身を投じたのは、昭和一五年、中支の第一線で体験した「宇宙即我」の体験のその事実と意義をよく理解しよく教えて下さる人に出合いたいということであった。その願いが実現したその喜びに、また今までいろいろ苦労したが苦労の仕甲斐があったという、それまでに苦労し悩んできた自分を自分でいたわるといふ愛ほしさの涙でもあった。

私が「宇宙即我」の体験をしていなかったら私は「生長の家」に満足していたかも知れない。「生長の家」の

中では誰も「宇宙即我」の体験をした人はいなかった。私が「宇宙即我」の体験を基にして考えたこと実践したことは、ある場合は「生長の家の教えと違う」といつて批判された。

生長の家をやめたのは、生長の家という組織の中にいたのでは求める人を自由に探し求めることはできないと思つたからであつた。

一つの宗教団体の組織の中で講師とか幹部とか指導的立場にある者は、信者に対しては教祖とか教主といわれる人を、絶対的に無謬的な存在として信ぜさせなければならないとされてゐる。信者も勿論そうであるが特に講師幹部が、その教国の教義に疑問を持ち。教祖や教主の間違いを発見した時の悩みは、その教団から給料をもらつて生活しているだけに深刻である。自分が信じられなくなつてゐるものを信者にだけ正しいから信じなさいというわけにゆかない。しかしいなければ生活ができない。

1、神理（真理）に忠実に生きるか。

2、生活のために間違いと知つていてもそれを隠して間違つた教を説くか。

私が悩んだと同じ悩みは、恐らく現在の日本の宗教団体の講師達はみな持つてゐると思う。私が生長の家をやる決心をした時、何人かの先輩の講師達から「園頭さん、よく考えなさい。前に○○講師も○○講師もやめた。その人達が今どんなにみじめな生活をしているか、生長の家の神様にそむいたから罰が当つたのだ。あなたもやめたら罰が当るよ。あなたは五人も子供があつてどうして生活してゆくつもりか」といわれた。

谷口雅春先生は、「生命の実相」の中に「神は罰を当てない」と書いていられるのであるが、こうした時になるとみな罰が当るといふのである。本部講師という最高の教化指導者の間でそうなのであるから、まして一般の信者間では教義に反する言動が頻繁になされていても別にそれを修正しようという人もいなかった。私だけでなく信者でやめた人達もみな「神さまの罰が当るとか「恩知らず」という言葉を背に受けてやめて行つたのである。生長の家は「神は罰を当てることはない」ということを教義にしているのであるから、生長の家の信者の間では「神は罰を当てない」ということが常識になり、「生長の家の神さまの罰が当る」という言葉は誰一人いう者がないうようにならなければならぬのであるが事實は違ふ。

私は先輩の本部講師達の神理に対する理解の浅さ、物事の本質を見極める力のなささとを悟ってもらうためにつぎのようにいった。「やめた先輩の本部講師達が今みじめな生活をしているのは、神さまの罰が当たったのでもなんでもない。永い間、宗教界で講師をしていたために社会の実情を知らず外に生活の手段を持たなかったからで、生活の手段を持っていればやめたからといって生活に困ることはないと思います。」

世の中のことを広く深く見る力を持たない人、また神理を正しく知らない人達は、現実には困っているという人の事実を目の前に突きつけられて「これは神さまの罰が当たった結果だ」といわれると、そこで思考を停止してしまつてなかなか信じ込んでしまうのである。

宗教団体の指導的な立場にある人で、その宗教に矛盾を感じてやめようかと思つていられる人は神の罰を心配される必要はない。罰を当てるような神は、神を詐称している動物霊かなにかであつて、ホンモノの神は絶対に罰を当てることはない。やめた後の生活の手段をすっかり考えれば生活に困ることはないのである。ともかく私は「宇宙即我」の体験の意義をよくわかつてくれる人を求めて生長の家をやめたのであつた。

昨年四月号から「悟りに至る道」を書いたのは、「どうして宇宙即我を体験したのか」そこまで至る私の心の過程をお知らせしたいと思つたからであつたが今年の新年号から特輯をつづけて出したので昨年十二月号で中断してしまつた。連隊副官にとの命令が出て一週間目に発熱と下痢がつづいてそのまま病床に臥すことになり、私の代りに鹿児島市出身の伊集院静馬中尉が副官をやることになり、私は第一線陣地の中に寝たままで中隊長として指揮をとることになった。そして病氣と闘いながら、どっちみち病氣で死ぬにしてもきれいな安らかな心で死にたいと小さい時からのことを反省しているところで中断したのであつた。「宇宙即我」の体験をした時のことを書くことにする。

「生命の実相」との出会い

病床に臥すといつても戦地である。持っている限りの薬を使つても私の熱が下らないことを知ると軍医は時々



「宇宙即我」の体験をして
はじめて陣地へ登った時(23才)

の高熱がつづいて食べるものも食べられないと「死」を観念せざるを得なかった。小さい時からのことを反省していたある日、中隊事務室の林雪利上等兵が、「家からこんな本が送ってきました。この本をよむとどんな病気でも治ると、家内の手紙に書いてありますが、よんでみられたらどうですか」と一冊の本を持ってきた。今でこそ「心で病気が治る」ということは医者もいうようになり常識になってきたが、その頃は、「病氣治しを説く宗教は邪教である」というのが当時の常識であったし、「本をよんで病気が治るなんてそんな馬鹿なことがあるものか」といったら、「とにかくここに置いて行きますから」と部屋を出て行った。その後である。中支の漢口附近は、夏は電線にとまっている雀が焼けて落ちるといわれる位高温多湿な所であるから六月というと昼間はもう相当に暑い。午後の気温が上るにつれて熱も高くなり、身体の中から燃えてくる高熱と外の温度の高さによってその苦しきは大変であった。喉はしきりに乾くが、湯冷しの生あたたかい水では乾きの癒しようもない。そのうちに目がくるくるまわり出し頭が割れそうにガンガン痛み呼吸が苦しくなつてハアハア肩で息をするようになった。胸が苦しくなり背中をさすつてもらったらラクになりそうであつたがその苦しさに耐えて輾転反側していた。

電話で容態を聞くだけで来なくなつた。「食べたくない」といえば看護兵は別に外になにか食べるものをつくってくれるわけでもない。肉体に本来備わっている自然治癒能力に頼る以外になかつた。天上界から使命を持つて地上に生まれてきた者が、自分で自覚して悟りを開かない場合には、天上界からいろいろな方法でその人が悟りを開くように仕向けることがあるので、その場合、断食同様の状態にして靈性を開発させることがあるということを知つたのは昭和三十年であつた。その頃はそんなことを知るよしもない。病氣では死にたくないと思つていたが一ヶ月半も四十度以上

「祈れ」という天からの声を聞く

夜になるのが待ち遠しかった。夜になってねむってしまえば身体の痛み苦しきは意識しなくなるからである。しかしその夜すらも待ち切れない思いがしてきた。あるつたけの最後の氣力をふり絞ってその苦しさに耐えぬこうとしてうんうん唸っていた。齒を喰い縛って耐えているよりは少し声を出すと身体が少しばかりラクになるのでつい声を出した。

夕暮れになった。当番兵が夕食はどうしようかと型の如く聞きにきた。「いらない」とやつというとはまたハアハア肩で息をしながら輾転反側していた。しかし、もう一ヶ月半以上高熱がつづいて食事も片栗粉を練つたのを三日に一ぺんづつすすっていたのであるからもはや体力も限界にきているのが自分でもよくわかった。もはや「これに負けてなるものか」と思う氣力すらなくなってきた。なんとかもう一度元氣になってという最後の氣力すらもはやつきたと思つた時、瞼の裏に浮んできたのは故里の父母と出征直前に婚約した女性の姿であつた。父母への親孝行もできなかった。婚約した女性との愛を全うすることもできなかったという悔いを残しながら「もうこれで死ぬのならこれも運命だ仕方がない」と思い諦めた瞬間「祈れ」という天からの声を聞いた。経験した人でないと「天からの声」というものはわからないと思うがそれはまさしく嚴肅な「天からの声」であつた。「祈れ」という声を聞いても一瞬どう祈っているのか戸惑つた。横に寝たままでは祈ることはできないとやつと起きたが頭も身体全部がふらふらして坐することはできない。そのまま前にうつ伏せになり両掌を畳につけて上に向けて掌で頭を抱えこむようにして自分の耳に少し聞える位の小さな声で祈り始めた。

「神さま」とそういつてみても神がないと否定する氣持にはそれまでもなれなかつたが、だからといって「神がある」と信じきる氣持にもまだなつてはいなかつた。ただ、神があるのならその実在をはつきり知りたいという願望が強かつた。「祈れ」という声は神の声としか思われなかつたので「神さま」とまず呼んだ。）

私はなんのためにこの世の中に生まれてきたのかわかりません。これまでそれを知りたいと思つてきました。しかしもはやそれを知ることなく死んで行かなければならないと思うといささか心残りです。なんのために

人間は生きるのか、自分はなんのためにこの世に生まれてきたのか、そのことはわからなくても、ともかく二十三才のこの年まで生きてきたということが私がこの世に生まれてきた目的をそれで果たしたのだというのであれば、私は静かにこのまま死んでまいります。しかし、まだまだ生きてなかなければならない使命が私に残されているのでありましてら生命をお与え下さい」と祈った後、それまで寝ながら反省していた自分の罪を言葉に出して懺悔していた心になにか引つ掛るものを残しては死にたくない。どうせ死ぬのなら心をきれいにして死んで行きたいと思ったので心の中にあるものを全部口に出して懺悔した。最後の氣力をふり絞って肩でイキをしながらの祈りと懺悔であつた。どれ位時間がかかったのかわからない。一時間以上も小さな声で祈ったであろうか。もうこれで祈ることは終つたし懺悔することは全部懺悔したと祈りをやめた時、立崎准尉が「隊長殿、どうかされましたか」とノックして部屋に入ってきた。私が祈って懺悔していた時、部屋の外では立崎准尉や橋口曹長をはじめ中隊指揮班の兵隊達が「なにか隊長はぶつぶついつている。気が狂ったんじゃないか」といつているのが聞えていた。一ヶ月も高熱でうなされて寝ていた揚句に一時間以上も小さな声でぶつぶついはじめたのであるから気が狂つたと思つたのも無理もない。頃合いを見て立崎准尉が入ってきたのであつた。「祈つた」というのがなにか恥かしいような気がして「いや別に」とそれだけやつといつた。「早く元氣になつて下さい、みな心配していますから」といつて部屋を出て行つた。身体から力がすっかり抜けていたのでうつ伏せになつて頭を抱えて祈つていた時、失禁して少し便が出て下着を汚したようであつた。便をつけたままで死んだら『うちの中隊長は「うんこ」垂れて死んでゐる』といわれて後で恥をかくから、下着だけはきれいに取り換えて死んで行こうと部屋の隅に置いてあつた行李のところに這つて行つた。体力が尽きてしまうと八畳位の部屋の隅に置いてある行李のところで這つて行くのも死ぬ思いで苦しかった。真新しい下着をやつと引き出して替えたが汚したような気がただけで別に汚してはいなかつた。ふとんのところまでやつと這つて帰るとごろつと横になつてもうこのまま死んでもいいと眼をつむつた。完全に私は生死を超越して死ぬことはこわくなかつた。

生きてゐることへの最後の感謝をして死を待つたのであつた。

「生命の実相」を見る、また「天の声」を聞く

私はねむっていたのだった。眼が覚めたのは翌日の十時頃だったと思う。眼が覚めた瞬間「あ、生きていた」もはや言葉の口にする力もなくなっていたが心の中でそう叫んだ。太陽の光りが美しかった。窓から見える木々の葉が明るい陽の光りに美しく踊っている。「自然は美しい」そう思った瞬間「枕許のその本をよめ」という声が天からした。ふしぎだ、あの声はどこから聞えてくるのかと思つて枕許を見ると林上等兵が持つてきた一冊の黒布表紙の本がそこにある。なんの本だろうと手をさし伸べてみると背に「生命の実相第一巻」と金文学で書かれてある。やせ細つた腕に一冊の本は重かつた。右に左にやつとのこと寝返りを打ち持ち変えてよみすんだ。

一、宇宙創造の神が人間がこしらえた小さな神殿にいられる筈がない。

神に神殿はいらない。

二、人間は罪の子ではない、神の子である。

三、神がおさい銭の多い少ないによつてお蔭をやつたりやらなかつたりされるときはまちがいである。神の救いに金はいらぬ。

四、運命は人の心がつくる、自分が運命の主人公である。

心で運命を支配せよ。

五、医者とは人の生命を知らない、人間にはみな自然治癒能力が本来備つてゐる。医者は病気を治すことはできない。医者は自然治癒能力を振り起すだけであつて病気が治るのは自然治癒能力が治すのである。

「これが本当だ、これが本当だ」と一つ一つうなづきながらよみすんだ。

お寺では「人間は罪惡深重の凡夫だ」と聞き、キリスト教会では「人間は罪の子だ」と聞かされ、人の運命は神仏が決められるのであつて、生れてくる者に定められた運命は人間がどんなに努力をしても変えることはできないのであると教えられて、いろいろ疑問に思つてきたことの解答が全部ここに書いてある。うれしくてたまら

なかった。「生命の実相」を持ってきてくれた林上等兵に、そうして戦地まで「生命の実相」を送って下さった林上等兵の奥さんに感謝した。

運命とはふしぎなものである。折角、奥さんが夫のことを思って送られたのであったのに林上等兵は「わたしは無神論者です」といつて自分はよまずに私のところに持ってきたのであった。その「生命の実相」によって私は悟りを開くことになったのである。

終戦になって復員した時、私は一番先に林雪利上等兵の奥さんにお礼をいいたいと思って林上等兵の本籍の鹿児島県飫島の役場に照会したのであったが現住所不明という返事がきた。林上等兵の奥さんは確か大阪出身だと聞いたような気がしている。もし縁あつて逢つてお礼ができたらしつとも思うことである。誰か林雪利氏の奥さんの消息を知つていられる方は教えて下さい。

「生命の実相」の中に谷口雅春先生のつぎのような体験のついていた。

「私は青年時代胃腸が弱かった。だから、いつもお粥ばかり食べていた。ある時、東洋医学の先生から「胃腸が弱いからといって軟らかいお粥ばかりを食べていると胃腸はたいして働かなくても消化することになるので一向に丈夫にならないのである。胃腸の弱い人はおにぎりをこんがり焼いたのと、ひじきを食べる方が丈夫になるのである」と聞いた。それから私はおにぎりを焼いて食べるようにしたら自然治癒能力が発揮されて胃腸の弱いのが治つてしまったのです」。

これをよんで私は早速実行した。それまでいつも当番兵がお粥を持ってきていたが、においを嗅ぐと胸がつかえて吐き気がして食べる気にならなかつたので当番兵に小さなおにぎりを焼いてくるように頼んだ。

焦げたおにぎりを永く嚙んで二口食べたらしつ後は食べられなかつた。二口であつたが腹におさまると腹に力が出てきて全身の細胞が音を立てて元氣になつて行くような感じがしてきた。お釈迦さまが断食したのでは悟れないと知られてスジャータという少女が捧げた牛乳を飲まれて元氣になられたとお経に書いてあるが、それは丁度今のこのような状態だつたのではなからうかと思つたりした。翌朝になつてみると、少し元氣が出てきた。この分ならもう一度元氣になれると思うようになった。午後になつてそろそろ熱が高くなる時分だと熱が上るのを

心待ちしていた。午后三時頃から六時頃がいちばん熱で苦しんでいた時間であった。その内に出てくるかもと心待ちしている間に午后六時を過ぎてしまった。つぎの日の午后になるとまた熱が上ってくるかと心待ちしていたがまた熱は出なかった。祈って「生命の実相」をよみ、人間は神の子であると知ったそのつぎの日から熱は出なくなった。最初は二口をやつとの思いで食べていたのがつぎの日は三口、つぎは四口とだんだん多く食べられるようになり、十日位すると焼かない普通のおにぎりの小さなのを一つ食べられるようになった。食べものが食べられるようになると少しづつ起きられるようになった。一ヶ月半も寝つづけていたので、起きて少し坐ろうとすると最初はふらふらして軽いめまいがして坐れない。めまいがしてくると吐き気がする。そんなことをくり返しているうちに三十分位つづけて坐わるようになると手紙を書いて私は東京の生長の家本部に「生命の実相全十二巻」を注文した。軍事郵便の航空便に頼んだので十日位で届いた。むさばるようによんだ。

「万教帰一」すべての教の真理は一つである。生長の家は神道、仏教、キリスト教を一つにまとめるのである。「人類光明化」世界の人々は人間を罪の子だと思っているがそれはまちがっている。生長の家は人類無罪宣言をして人々の心を罪より解放して光明化するのである。よんで行くうちに私の心は変わって行った。

「宇宙即我」の体験

『この「神想観」は私が神さまから授かった観法である』と書いてそのやり方が書いてあった。昭和十五年六月末であつたということは記憶しているが何日であつたかは記憶していない。正座して背筋を真直に伸ばして合掌した手を肩間の高さに上げて静かに腹で呼吸をしてと書かれてある通りに坐つて心を統一して行った。吸う息は光りとなつてその光りは全身の細胞の中に浸透して細胞を甦らせる、そういう思いがしてきた。すると今まで感じたことのなかつたエネルギー大生命力が全身に充溢してゆくのである。坐つて十分は経つただろうかと思われる頃、背骨が天へすーっと高く伸びたというような気がしてきたと思うと私の意識は天にあって、その意識その心は、坐っている肉体の自分をはるかに下に小さく見ている。目の前に太陽があり、太陽と自分と一体となつて地球が小さく回転している。外から耳に聞えると思つていた鳥の声が外からでなくて自分の腹の中から聞え

てくる。長沙方面の偵察に行く戦斗機の編隊は自分の腹の中を爆音を立てながら飛んで行く、部屋の外を話しながら歩く兵隊の話しもみな腹の中から聞えてくる。太陽も地球もすべてが自分の腹の中にあるのである。その時に私は宇宙が自分であり人間はみな生命の兄弟であることがわかったのであった。どれ位経ったか時間はわからないが突然天空で「パーッ」という音がしてハツとして目を空けた。見ると、あたりの木も草も石ころも屋根の瓦も柱も床も、見るものすべてが黄金の光にゆらゆら輝いて光っているのである、すべてが生きているのである。

「万物はすべて神の生命であり神の光りである」ということがわかったのであった。

私は神の実在を知ったのであった。人間が神の子であり万生万物もみな神の生命であり、自分が自分の運命の主人公であることを知ったのであった。この真実の体験を部下全員に話して人間は神の子であることを自覚してもらいたいと思ったが、しかし、こういうことを話せば部下達は「中隊長は気が狂った」としかいわないであろうと思うと話することはやめた。その代りに私は祈った。

「神よ、神が実在しますことを私自身の肉体的な体験を通じて知らしめ給え」と。

これは昭和十六年秋の第一次長沙作戦のロート河の会戦で私の中隊だけが敵中に突進して迫撃砲十三門の集中砲弾を浴びた時、占領した山の頂上に坐って祈ったこと、大東亜戦争が始まって昭和十八年六月、ニュージョジア島ムンダでアメリカ空軍の爆撃の中に坐って祈った奇蹟によって実証することができた。

「瞑想」についての本が沢山書店に出ている。どの本を見ても「宇宙即我」の体験をしたという人のことは書いてない。ある人は頭上一米ばかりのところになんか自分があるのがわかったと書いていられるが、そのような体験をした人はまだいい方である。

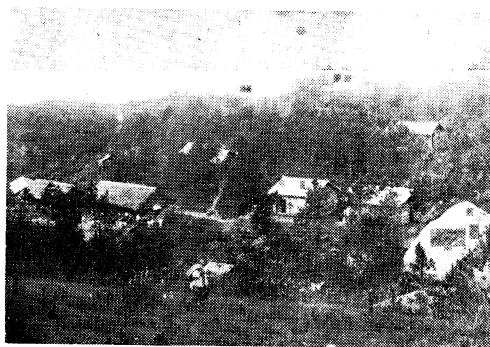
「宇宙即我」の境地を体験してやっと外を歩けるようになり、暫らく見なかつた第一線陣地を視察しようと陣地へ立ったら、偶然そこへ通城の城内で写真屋をやっていた鹿児島出身の人（名前を記憶していない）が三脚の写真機を担いでやってきた。「第一線陣地の風景を記念に撮って置きたいと思って今日はやってきました」というのである。幸いにその日は陣前に敵はいず陣地はのどかであった。ポーズをとって下さいというので、こ

れでいいですかといって写してもらった。「宇宙即我」の体験をした直後の記念すべき写真である。この写真も母が空襲で亡くなる前日に家内に遺して置いてくれたものでこうした遺された写真を見るたびに母に感謝し運命のふしぎさ、人智のはかり知れない天上界からの神秘さを感じずにはいられないのである。「宇宙即我」の体験をしてから、正しい想念はすべての人、すべての物を正しく生かすが、悪い想念は人、物を破壊するものであることをはつきり知ることができるようになった。自分が悪い暗い想念を持つと、その想念は神の光りを覆つて人々の心を暗くするものであることがわかったから私は暗い想念を起さないように、いつも明るい想念を持つように努めた。戦争は人々が幸福を求めて生活をしているその願いに反して人と人とが殺し合うことを強制する。受する人々を残して敵も味方も多くの人々が死んで行つた。この世界から戦争をなくして平和を招来するには、人間は神の子であることの事実が全世界の人々に理解されること以外にない、そう思ったことから、誰が戦争を計画したのか、どうして戦争はなくならないのかを知りたいと思つていろ／＼調べていたことはやがてユダヤ問題につき当つたのである。

終戦後生長の家の運動に身を捧げた

「人間は神の子である」と宣言したのは生長の家だけであつた。他の既成・新興宗教の教団はほとんどが「人間は罪の子である」ことを前提として教義を説いていた。「生命の実相」をよんで以来、私は教々の奇蹟的な体験をし、また私が指導した人達がみなよくなつていった。そうした事実からこの生長の家の教を普及することが世界を平和にすることになると信じた。

昭和二十七年から私は鹿児島で生長の家の地方講師として布教活動を始めた。私が布教活動を始めた当時鹿児島には三ヶ所しか相愛会はなかつた。私が行く所つぎつぎに奇蹟が起つて二年間に四十ヶ所にふえた。昭和二十七年に活動を始めると同時に谷口先生に意見を出していた「アメリカ占領政策の批判をはじめなければならぬ」ということが採り上げられて生長の家は愛国運動を始めることになった。昭和三十年三月、本部講師になつ



「宇宙即我」の体験をした中支通城県
舒家の陣地。この家は兵隊達がみな造
った

てまもなく「天と地とを結ぶ電話」が発刊された。それをよんでこの本の中に書かれていることが正しいと思った。私の宗教的信念は左の三つによってつくられた。

一、「生命の実相」第一巻の教説

二、「宇宙即我」の体験と、その体験以後に起った
数々の奇蹟

三、「天と地とを結ぶ電話」の中に示されてある神
理

生長の家はいうこととやることが違ってきた。そこに私がやめる原因があった。

「神に神殿はいらない」「神の救いに金はいらない」ということを「生命の実相」には書いてあるのに、宇治に宝蔵神社を造り後には稲荷大明神まで祭るようになった。会費を沢山納め月刊誌を一括して百部以上買わないと、教義、真理は二の次になってどうして会員をふやすか、どうして金を集めて大きな殿堂を造るかという組織上のことに重点を置いて活動するようになることである。それを逆に考えた場合、全国各地に大きな殿堂会館を造っている教団は正しく真理を説いていないということもできる。宗教産業であるという言葉を使ったのは私が始めてであると思っているが、昭和三十年に本部講師になって昭和四十六年に生長の家をやめるまでの十六

年間の私の本部講師としての活動は、如何にして生長の家を正しい宗教団体にするかという苦心の連続であった。会議があるといつも正論を吐いたが民主主義の多数決原理に支配されて私の意見は仲々採り上げられなかった。「宇宙即我」の体験をした人は生長の家の中にはいなかった。だから他の人達は私の境地を理解できなかったといえる。「天と地とを結ぶ電話」の中に書かれてあることがどんなにすばらしい真理であるかということも理解している人はほとんどなかった。毎年毎年、会議の度毎に「組織拡大、会員をふやせ、月刊誌を沢山売れ」ということが方針になって、本部講師の成績はどれだけ正しく真理を伝えたかではなくして、どれだけ沢山会員と会費を集めたかという人数と金額によって評定されることになった。

「私がみなさんのために祈ってあげます。そうするとみなさんに大きな功德が現われます」と言葉巧みに勧誘するセールスマンもどきの講師が一番よい本部講師ということになって、私のように「心を大事にしない、功德を求めていくら献金しても本を買ってもそれはなんにもなりません。無償の奉仕こそ尊いのです。奇蹟を求めて信仰してはなりません」と神理を正しく説く者は、会員達からは「圓頭先生のいわれることが本当だ」と信頼されても、無償の奉仕による金でないと私が受取らないので本部へ納める金額は他の講師よりも少ないということになり成績が上らないということになってしまった。宗教団体が宗教産業となり、講師が神仏の名を利用し功德を売り物にするセールスマンになってしまったらもう終りである。気の毒なのは会員である。純心で無知であるという人ほど現世利益を売物にする言葉にごまかされて狂信的になってゆくのである。「宇宙即我」の体験と「天と地とを結ぶ電話」とがなかったら私も外の本部講師と同じような行動を取っていたかも知れない。しかし、私自身が体験した真実をごまかして、まちがっていることを知っていながら、そのまちがいを正しいといつて会員に説くことは私にはできなかった。講師として、生活の為に神理をごまかすということは私にはできなかった。たとえば乞食しても神理を歪めて説いてはならないというきびしいものが私にはあった。それがあつたから私は迎合せずおもねることをしなかった。私が生長の家のやめたのは、私の体験の真実と信念の正しさを証明してくれる人がどこかにいられる筈だという正しい人と神理を求めての旅立ちであつたのである。

高橋信次先生との出逢いの真実

私は昭和十五年の私の体験が、「宇宙即我」という言葉で表現されるものであることは高橋先生の口からその言葉を聞くまでは全く知らなかった。だから昭和四十八年三月にはじめて逢った時、「園頭さん、あなたは「宇宙即我」の体験をしましたね」といわれたその時、私はそれがどういふことであるか一瞬わからなかったのである。「さてこれは……」と考えた時にふと頭に浮んできたのが昭和十五年の体験であった。高橋先生に質問されてから、あの体験を「宇宙即我」というのだと知るまでには何秒もかからなかった。「そうです」といったら「あなたは今までいろいろなこともあったけれども、今は心をきれいにしてもう一度最初から出直しだと思っておりますね」といわれた。全くそうであった。そうして「あなたはロサンゼルスにあるアガシヤ教会のことを知っていますね。あのリチャード・ゼナーを指導したアガシヤ系の指導霊は、われわれと同じ仲間ですよ」といわれたのであった。私は求めている人に出逢ったのである。私のあの体験が真実であったことを証明して下さる人を今自分分は知ったのである。高橋信次先生の著書「心の発見」と「原説般若心経」をよんで高橋先生が説いていられたことの正しさを知り、そうして求めていた二つのことの正しさが証明されて私は高橋信次先生を信ずることができたのであった。先月号に書いたように昭和四十八年四月、いわゆる霊道を聞いた時に私は自分の過去世の名を知り高橋信次先生がインドに釈迦として出られた方であったことをこの眼ではつきりと見たのである。まことに釈尊は日本に生まれていられたのであった。

正法は正しく伝えられなければならない

神は永遠不変であり神がつくられた法も永遠不変である。天上界も地上界もすべて神がつくられた法を基準として存在せしめられている。神以外に存在せしめるものはない。宗教は神の神理を説くものであるが神理即ち正

法は永遠不変なのであるから説くことは終始一貫していなければならない。だから、その宗教が正しく神理を伝えるものであるかどうかは、始めと中頃と現在と説くことが違つてはいないかどうかを知ればよいのである。

始めと中頃と現在と説くことが違っているものは正しい宗教ではない。神理が永遠不変であることを知つていたら始めと中頃と現在とで説くことが違つてきたらこれはおかしいと思わなければならないのに、説くことが違つてきてもその違いに気づかず、にその宗教の会員信者となつてゐる人が非常に多いのは、いかに日本人の信仰が曖昧で物ごとをしつかり考えることをしないかといふことの現われである。

生長の家は立教当初は正しい神理を説いたのである。「生命の実相」をよんで私はそう信じた。私は生長の家が正しい神理を説きつづけることを念願とした。しかしその願ひは空しく歪められたのである。歪められたものはもはや神理ではない。私は間違つてゐるとわかつてゐることを会員には正しいといつて伝えることはできなかった。神を無視し神理を歪めて伝えることによつて自分の生活を支えてゆくことはできなかった。私が正しく神理を求め且伝えようすることは、生活のために平気で間違つたことを説く人達から見れば偏狭、固陋、独善、排他的と見えたに違ひない。ある人はつぎのようにいつて私のあり方を認めて下さつた。たつた一人であつても自分の立場を認めて下さる人があつたことはうれしかった。

「先生、三つ眼の化けものの猿が百匹いる中に、二つ眼の当り前の猿が一匹いれば、その二つ眼の猿の方が化けものにされてしまうのですよ」と。

間違つたことを説く人達を化けものだといふわけではないが、末法の世となつて神理が昏^クまされてゐる現在では神理を正しく信じようとする人は余りにも数が少ない。今は少なくともよいのである。これから確実にふえてゆくのである。

もう一つの事実、この事実も伝えて置かなければならない

昭和四十八年四月、高橋信次先生が釈尊であつたことをこの眼で見、私が自分の過去世のことを知り、五月に

関西の講演会場で過去世で一緒であった人達とはじめて逢った後、高橋信次先生から「五月二十三日に東京で会議をするからあなたも出席して下さい」といわれた。その当時の理事達にはじめて逢った。はじめて会議に出たのであったが、日本の宗教界のいろいろなことを見てきた私から見ると、これでは高橋信次先生が説かれる正法を正しく伝えて行く力はG L Aにはないと思った。そうわかっただけに自分がしつかりしなければならぬと思った。昭和四十九年十月、インドの当時と同じ修業をしようと思賀高原に反省と禪定の研修に高橋信次先生と行った時、高橋先生は私にいわれたのであった。

「園頭さん、僕は今のG L Aはつぶしてもかまわないと思っています。僕だけ一人が先に進んでも正法を広く伝えることはできないのでみんなが勉強し前進してくれないと困るのです。東京の講師達は少しも勉強しません。高橋先生がこれだけのことをいわれたのは、「園頭さん、あなただけは正しく正法を伝えて下さいよ」といつていられることであると思ったから、その時私は、「先生、私はしつかりと先生が説かれた正法を伝えてゆきます」と心の中に誓ったのであった。この時、高橋先生が私にいわれた言葉は偶然にテープに録音されて残っている。昭和五十一年六月、高橋信次先生が昇天された後、高橋先生が私にいわれたことは事実となつて今、現われてきている。高橋先生の側近にあつた講師達がほとんど全部、高橋先生の説かれたことに背き、高橋先生が説かれたことを正しく伝えてゆくというのは私一人になった。私一人でもいいのである。私はこれから後三十年は生きて正しく伝えてゆくように思っているからこれから三十年説きつづける間には正法も大きく広がってゆくであろう。

「ガブリエル」ということ

五月二十三日の理事会が終つた後、何人かが高橋先生の部屋に呼ばれた。高橋先生が市川市のK氏に、「あなた、ちよつと精神統一をしてみして下さい」といわれた。そのK氏が精神統一に入つて二、三分すると私の前にパツと身体を投げ出して「五体投地」の礼をして「過去世ではいろいろご深切に指導して頂いてありがとうございます

ました」といわれた。五体投地の礼は今でも比叡山でもやっているし、インドのブッダガヤ（釈尊成道の地）でもやっているが、もともとは奴隷の人達が貴族に對する礼であつたのである。奴隷階層の人達が釈尊の前に出るとみな五体投地の礼をしていたことが今に残っているわけである。

貴族出身の人が釈尊の前に出る時は、釈尊の廻りを三べん廻つて正面に、両足を揃えて爪先を立てて坐り、掌を上に向けて揃えて地につけ額をその掌につけて礼をしていたのである。釈尊の廻りを三べん廻つて礼をしたことが今では仏像やお堂の廻りを廻つて礼拝をする形になつて残つてきたのであらう。そのK氏も高橋信次先生が生存中に高橋先生の下を去つてしまわれた。

K氏が私に五体投地の礼をされた後、玄奘三蔵法師が中国からインドへ經典を取りに行かれた時の話があり、その後で私は高橋先生からまた別の部屋に呼ばれた。そうしていきなり、「あなたはインドのつぎにはどうしたのですか想い出しなさい」といわれた。人間はいつも「頭で考える」という習慣が身についている。だからつい私も頭で考えた。答えは出てこない。實際は人間は心で考えるということをしなければいけないのである。心で考えるという習慣を身につけると人生を誤まることなく幸福に生きてゆけるのである。昔の人は大事なことはみな「とっくりと胸に手を当てて思案をする」といつていた。輕卒などでもない間違いをする人達とはとっくりと胸で思案をしないからである。

頭で考えようとしていたその力を下の方へ引き下げて胸の奥で考えた。

「どこでどうしたのですか」と自分で自分の心に聞いて私の心の中に浮んできたことをそのままいった。

「インドのつぎは私はイスラエルでキリストの時代、ガブリエルという名で天上界からいろいろの役目を果たしました。」

素晴らしい終ると私はなつかしさの思いに涙したのであつた。ガブリエルのことは聖書をよんで知っていたが、その名が自分の心の中から出てきたことのふしぎに自分で驚き、この地上界に生れ出た靈魂を救うための天上界の計画がどのような深い慈悲による配慮がなされているのかとその綿密周到なふしぎさに涙したのであつた。天上界からこの地上界に姿を現わしている自分のふしぎさに私はまた改めて、「正法を正しく伝えなければならな

い」と思ったのであった。

高橋信次先生の口からガブリエルの名が出てくるのは亡くなられる直前の山形の研修会である。七大天使の筆頭として神理を正しく伝える使命を持っている人がガブリエルでありますと語られたのであった。

釈尊の時代、舍利弗として釈尊に仕えたことを四月に想い出し、五月にはこんどはキリストの時代に天上界からキリストの伝道に協力したことを想い出した時、今生で生まれてからのいろいろな体験は、すべて今生で人々を救わんがために必要なことを学ぶためであったことと、「生命の実相」をよんだ直後に「宇宙即我」の体験をしたことを生長の家の神のお陰だと思ってきたことは、実は生長の家の神のお陰ではなくて自分自身がこれまでの過去世の体験で習得したものであったことがわかり、生長の家は、正しい神理を知るための準備の宗教として現われて来たものであったということがわかってきたのであった。

高橋信次先生が正法を説き出されるまでの間は、生長の家はいちばん正法に近い宗教であったといえる。しかし、立教当初は正しかったものが終戦という時を経て来ているうちにだんだん歪められ遂に長崎県西彼町に約百億近くかけて神社を造ってしまった。この九州別格本山の計画がつくられた時私は既に生長の家をやめていたがやはり生長の家を愛していたので、立教当初の精神に帰って神社は造らないようにして下さいと谷口雅春先生にお願いをしたのであったが遂に造ってしまった。生命の実相に「神に神殿はいらない」と説かれたことを自分で否定してしまわれたのである。

私は、私自身の上についた過去世のいろいろな現証の事実を発表することがこれから私自身の上にとどのような変化をもたらすかを覚悟している。そうした現証の事実の上に立って高橋信次先生が亡くなられた後の事実が事実として、後世の人々に正法を正しく知っていただくために書いて置かなければならないと思ったのである。

ガブリエルとは誰であるか

昨年十二月号で「GLAのことは書かない」と約束したのに、今また書かなければならないことを許していた

だきたい。インドの仏跡巡拝をし高橋信次先生の五周忌をすませてやはり事實は事實として書いて置くことが後世の人々をして正しく判断をさせることになると思うので書くことにする。

昭和五十二年三月五日、G L A 本部から緊急理事会を開くので上京してほしいということで上京した。その時 G L A の二代目・高橋佳子氏は「私はミカエルである。私が人類の救世主である。私が出現した以上、釈迦、キリストの教も高橋信次先生の教も必要はなくなったのである。あと五年したら世界の人類は私の下に集まるのである。みんなは私に誓いなさい」という「ミカエル宣言」があつたのである。他の理事達はみな誓つたが私は一人だけは誓わなかった。

キリストは、「誓いを強制するものはサタンである」といつていられる。だから「誓え」という高圧的なその態度に疑問を持った。誓う人はみな誓い終つた。私は平然として冷静にみんなが誓うのを見ていた。すると高橋佳子氏は「いま、ここに、ガブリエルがきています。ガブリエルの言葉を伝えます」といい出された。ミカエルであるのならミカエルとしていわれるといいのになぜ今ガブリエルを持ち出さなければならぬのか私は疑問に思つた。私はガブリエルであることを意識している。それなのに高橋佳子氏が「ガブリエルが天界から私になにかをいう」といつていられるそのガブリエルという者は一体なにをいうのであるかと、じつと冷静に腕を組んで聞いていた。他の理事達は頭を垂れて黙つて聞いていた。それは高橋佳子氏が天界からの通信であるかのように見せかけるために頭の中で作文したものであり、その言葉の中に、現在 G L A 本部にいる谷口健彦氏が宮崎で私にいつたことと同じ言葉が出てきた。側近の者の入れ知恵を天界からの通信と偽つていわれるようなことをされると、それを正しく見抜く力を持っている者はよいが、靈能現象に弱い人達、盲信狂信している人達は簡単にごまかされてしまうなど非常な危険性を感じ、これから G L A は混乱分裂が起ると思つたのであつた。

過去世に於てガブリエルという名であつたという意識を持つ私がいるのに、「ガブリエルが私の傍に来ています」と佳子氏がいわれたことは失敗であつた。だから高橋信次先生亡き後の G L A は会員をごまかすことから出発したといえる。折角高橋信次先生が正法を説かれたのに、その未亡人と子供によって正法が否定され始めたのである。その理事会が終つて家に帰り熟慮した末、私は当時関西本部の事務局長をしていた林正氏に「これか

らGLAは混乱し分裂する。佳子氏の言をそのまま信用してはならない」という手紙を書いた。林正事務局長に手紙を出したのは、林氏に伝えて置けば林氏は関西本部長中谷義雄氏に伝えるであろうし、GLAの組織の中で一番会員の多い関西本部が正しく判断をしてくれれば高橋信次先生の正法が歪められることはないと思つたからである。私が予告したように五月になると脱会者が続出し混乱が起り始めた。

GLAの講師達は、やめて行く人をサタンだといひ始めた。まちがつてゐることを忠告した私に対しても「大サタンだ」といひ始めた。中谷義雄氏はGLAを脱退したが、関西本部全体としては今でも高橋佳子氏を信じてゐる。高橋佳子氏を信じてゐるのなら一つにあるべきであるのに、林正氏は関西本部を脱退してミカエル佳子氏を支持する一派をこしらえた。

昭和五十二年三月五日のガブリエルの通信がまちがつてゐることを見抜いたのに三宝出版の社長をしていられた堀田和成氏がゐる。九月初めに熱海で開かれた緊急理事会で堀田氏は「ガブリエルの通信はニセモノである」ことを発表された。天上界からの通信ではないのに天上界からの通信であるかのような詐術を使うことによつて正しく神理が伝えられる筈がない。だから堀田氏はGLAを脱退された。ガブリエルとしての過去世の意識を持つ私が、「釈迦、キリストの教はまちがつてゐる。高橋信次先生の教は必要はない」という人の下にとどまつていられる筈はない。反省を促してももはやどうしようもないと見切りをつけて私も脱退したのであるが、他の理事達は依然として佳子氏を信じてゐる。

なぜGLAが四十五歳以上の人と、宗教遍歴をして来た人とを会員にしないという方針をとつたか

一言にしていえば、GLAの若い講師達は、そういう人達を指導できないからであると私は思つてゐる。

昭和四十九年十一月、名古屋で高橋信次先生の講演会があり、私はその前座として「どうして生長の家をやめたか」を話した。生長の家の人達も沢山来ておられた。その講演会の後、宮崎の高見ちさ子氏が名古屋に行かれて「生長の家の人達が中京本部事務局長の谷口健彦氏を呼んで話を聞いたら、谷口氏は生長の家の人達の質問に

答えることが出来ず、真蒼になって帰って来た」という話を私にされた。それで私は谷口氏に「もし生長の家だけでなく、他の宗教団体の人達が正法の話を知りたいというのであったら、私はあなた達以上にいろいろな宗教の勉強もしているから私が行って話をしてもよい、また、名古屋のGLAの会員の中に私の話を聞きたいといっている人もあるから、私の講演会を計画してほしい」という手紙を書いたが返事はなかった。恐らく東京でも同じようなことが起っているに違いないと思い、また東京の会員から「園頭先生の講演会は東京ではないのですか」という手紙が何通も来ていたので、当時の事務局長の高橋武氏に同様の手紙を出していたが、これに對してもなんの返事もなかった。

この二つのことからして、東京本部、中京本部の講師達は、自分達の縄張りをこしらえて、その縄張りの中で、その中の会員達から「自分を一番立派だ」と思われたいという実に偏狭な縄張り根性と誤った名誉欲を持っているなどと思い、これでは高橋信次先生が「GLAはつぶしてもかまわない」といわれる筈だと思ってきたのである。私は一人でも「あの先生の話が聞きたい」という人があつたら、私はその講師に来てもらった。しかし、東京、中京、関西の講師達は、会員の中に私の話を聞きたいという人が沢山あつても一ぺんも私に講演をさせるということはしなかったのである。こうしたことからいえることは、宗教指導者の誤った地位欲、名誉欲、縄張り根性が神理を大きく歪めてしまっていることである。そのような指導者の下にいる会員達は、その講師一人だけの話しか聞かされてないのであるから、自分では正しい信仰をしていると思つていても實際は実に狭いものしか聞かされていないのである。

GLAが年令制限をしたり、宗教遍歴をした人は会員にしないという方針を取つたのは、いろいろな人達を指導する力がないことを自覚している講師達が、自分の地位欲を名与欲を満足させたいばかりにそのような方針をとつたとしか考えられないのである。そのことだけ取つてみてもGLAは正法を説く資格はないといえるのではないのであろうか。

正法会は一切の制限を設けないのである。また私はどんな人の話でも聞きなさいといっている。いろいろな人の話を聞かれれば、ますます、正法でなければならぬということがわかってくるからである。

私にならって、現在の日本の宗教団体の指導者達は、「どんな人の話でも聞きなさい、どんな本でもよみなさい」と信者の心を解放すべきである。

北海道の生長の家の人から「ある本を人にすゝめたら、相愛会の幹部からなぜ生長の家以外の本をすゝめるのか、とひどく攻撃されました」という手紙が来た。信者や会員の心を束縛するものは正しい神理ではない。

教祖、教主という立場にある人が、「私のいうことだけ信じなさい。外の人の話を聞いてはいけません」といったら、そのひとことだけでその教祖、教主は神理を知っていないといふべきである。一人の教祖、教主のいうことだけを信ずることが純粹な信仰だと説いているが、それは純粹という言葉によつてごまかされている 信狂信ではない。

私は私自身の心の中から、「ガブリエル」という名が想い出された時に私自身がびっくりした。その瞬間、私は正法を正しく伝えてゆかなければならないと心の中で誓ったのであった。

正法こそは大いなる悟り、大いなる心の安らかさの原点である。

正法こそ万教帰一の原点である。

十歳の頃から「人生の目的」を問いつづけ、仏教、キリスト教を遍歴し、戦争中、生長の家に触れ「宇宙即我」を体験し霧島神宮で古神道を学び、特に荒深道齊先生の教によつて心の眼を開き、終戦になつて、終戦後の生長の家発展の原動力となり、本部講師となり、「天と地とを結ぶ電話」をよみ、そうして高橋信次先生の正法を聞いた時、神道、仏教、キリスト教の神理はすべて一つであることがわかつたのであった。

生長の家は「万教帰一」を教義としているが、生長の家が説く万教帰一論は理論としては一応正しいといえるがその根拠は薄弱であり、生長の家のいろいろな儀式は万教帰一の立場を自ら否定している。

生長の家は昭和五年の立教当初には、「神殿はいらない」と説いたのである。しかし、宇治と大村に大きな神社造った。キリスト教は偶像崇拜をしない。古神道も偶像崇拜を否定している。神道、仏教、キリスト教は本来一つであると説くのであれば、生長の家は神社を造つてはならなかつたのである。宇治に宝蔵神社ができた時、

本部講師は必ず大きな石灯籠を寄進しなければならないと定められた。その時四十人ばかりの本部講師の中で私一人だけが寄進しなかった。その灯籠には名前を刻み込むことになっていた。私が灯籠を寄進しないというところで当時は裏切り者みたいにいわれたものであったが、正法を説く今の立場になってみると、あの時、心の中からの囁きに順って灯籠を寄進しなくてよかった。自分の行動はすべて天上界からの計画によってなされてきたのであるということをつくづく思わされるのである。正法は偶像崇拜をするものではないし灯籠を寄進してもそれはなんの功德にもならないことを私は知っていたからである。

宇宙は一つしかない。神は一つである。その神の神理がいくつもあるわけではない。理論的に万教帰一を唱えても実際にやっていることが万教帰一的でなかったらその万教帰一論はウソであるということになる。G L Aが人類を救うといいながら年令制限や経歴制限をしていることはそれだけで神理を説く資格はない。G L Aはつぶしてもかまわないといわれた高橋信次先生のことばを、G L Aを継ぐと称する人達が演出して見せたのであることも天上界からの計画であるとしか考えようがない。正法に目覚めなければいつまでも宗教の対立はつづく。

終りに

高橋信次先生は釈尊であつた。その事実をはつきりと知り自分の過去世を知った以上、私が生きる道は正法を正しく伝えること以外にない。高橋信次先生の五周忌を迎えますますその決心を固くするばかりである。私は生長の家という教団の中での体験を通して正法を知り、生長の家の中では得ることのできなかつた心の安らかさと悟りを得ることができた。今自分が信じている宗教で心の安らかさと悟りを得ることができずに悩んでいられる方には正法を知ってほしいのである。

信仰は自分のためにするのであつて教団のためにするのであつてはならない。どんなに教団のために奉仕しても自分が救われずいつも悩みばかりを持っていたのではそれではなんにもならないではないか。

正法は心を自由に解放して自分一人で救われてゆく道を教える。

邪法は心を束縛して教団集團の奴隸となることを強制し、教団集團を離れたら罰が当る、救われないと説く。どちらを選択するかはあなた方の心次第である。

高橋信次先生が釈尊であつたということと、私自身の上に起つた事実を事実として書き残して置くことが今後、百年、千年後にも正法を正しく伝える資料となることを信じている。

釈尊は悟りを開かれた後、伝来のバラモンの教と当時有名であつた六人の教祖の教がまちがっていることを説かれた。(六師外道)即ち比較宗教学的な話もされたのである。その六人の中には無神論者もあり、苦行をしなければ救われないと説く人あり、また、全くの自然主義者で裸で生活することを説く人もあり、また、アサンヂヤという人のように、「あなたが靈があると思うのであれば靈はあるのであり、ないと思うのならはないのである」と説く人もあつた。だからアサンヂヤの説は「あ、いえ、こういふ、こういふ、いふ」といふ鰻のようにつかまえて置かない鰻論である」と今でも伝えられている。舍利弗と大目蓮はこのアサンヂヤの弟子であつた。二人はアサンヂヤの教に納得できずに法を求めてラジヤグリハへ行き、そこで釈尊に皈依したのである。

舍利弗と大目蓮が去ることを告げた時、アサンヂヤは行くのはやめてくれといった。しかし二人はそれぞれの弟子を連れて去つた。アサンヂヤは有名な弟子に去られた悲しみに血を吐いて死んだ。そのように釈尊の弟子になつた人達はそれぞれそれまで信じていた教祖の下を去つて皈依したのである。

信仰は自由である。高橋信次先生の本をよみ教を聞いて、高橋信次先生の教えが正しい、高橋信次先生は釈尊であつたと信ずる人達が、それまで信じていた宗教を捨てて正法に皈依するのは当然である。私は生長の家を捨てて正法に皈依した。そうして悟ることができた。ところが私が生長の家をやめたことは「恩知らずである」という手紙がある人からもらった。私は生長の家の家をやめる時、生長の家の問題を述べて生長の家が正しく真理を説く教団であつてほしいという願いを残してやめた。今でもその氣持に変わりはない。私が「恩知らず」であるのかどうかは皆さんの判断にお任せする。

前にも書いたが、各教団はやめて行く人達を「恩知らず」とか「罰が当る」とかといつてやめさせまいとしてはならない。むしろその人を納得させることができなかったことを反省し懺悔し、そのことをやめて行く人達の

前に詫びるべきであると私は思っている。これから世界が一つになって行こうというのに、日本人が広い国際感覚を持つことができないその原因の一つは、日本の各宗教が持つている閉鎖性にある。日本の宗教界が浄化されるためには各宗教団体は入信する人達に入信する前に、「この宗教で満足できなくなったらいつでも自由におやめになって結構です」というべきである。悟りとは今まで閉ざされていた心が神理を知って広く心が開かれてゆくことである。信者会員の心を教団という一つの集団の圧力で閉鎖的にして開かせないということは、その教団の大きな罪である。教団の指導者達は信者会員の心を束縛し閉ざしてはならない。

宗教というものは、神の正法の前には人々の心を解放させるべきものである。

「高橋信次先生は釈尊であつた」「釈尊は日本に生まれていられた」私は私自身の上につたふしぎな現世の事実を事実として後世の人々のためにここに書き残して置くのである。

生長の家の「生命の実相」とその他の出版物も、GLAの「ミカエル」と「ガブリエルの通信と称せられるもの」も、この「正法誌」も、今後、百年、五百年後、否、千年後までも残つて行く。その後世の人達が三つの出版物を並べてみた時にどれがいちばん正しく神理を伝えていると判断するであろうか、今生だけで人をごまかしてみても、あの世とつぎの時代の人々をごまかすことはできないのである。生命が永遠であることを知つたら今生だけをいい加減にごまかして生きることはできないであろうし、まして宗教家が、生命の輪廻転生を説きながら、一方では、この世だけで人をごまかしてまちがったことを説くということはできない筈だと思ふのであるが、平氣でまちがったことを説いている宗教家のなんと多いことか。今はまだ多くの人々は気づいていない。高橋信次先生が釈尊であつたことを知る日が必ずくる。知らなければならぬのである。その日が来た時に人類は世界平和への曙光を見出すのである。

世界平和の原理は「正法」にしかないのである。

私は、高橋信次先生が釈尊であつたことを書き残して置く。